

第1章

歴代支部長の思い出

まえがき

日本機械学会関東支部は、設立 20 周年を迎えます。その活動は、歴代支部長を中心に進められてきました。そこで、本章では、歴代支部長のみなさまに、支部長当時の思い出を語っていただきました。

関東支部設立経過と第1期支部長の思い出

第1期支部長（環境システムエンジニアリング株式会社）
杉島 和三郎



支部20周年記念誌第1期の投稿は時が経ち、記憶の糸を探りながらの記述であることをお断りし、支部発足前史や設立総会と第1期の活動状況を述べることにする。

当時は既に各地区に学会支部が設立済だったが、0区（山梨県を含む関東地区）のみは約4万の会員の50%近くが在籍しているのに支部がなく、役員選挙などの課題が生じていた。そのため0区支部発足準備会設立が理事会で決定され、直前に会員部会長を拝命していたことから、1991年に浅学の小生が委員長に任命された。

早速0区全域から委員を選出し2年間にわたって他支部運営状況、支部名称、会員が多数であることから県単位ブロック制採用などの構想案を理事会に答申し、1993年に関東支部設立準備会の設立が決定され引き続き委員長を拝命した。委員は0区準備委員に就任願い、4回の委員会で委員選任案、暫定規則、学生会連携、支部予算、活動構想、設立総会準備などを審議し、設立総会を迎えたのは1年後の1994年5月20日で、麴町の弘済会館であった。

総会には来賓、各支部長、会員のご出席を頂き、実行委員長の神本東工大教授が司会され、準備会経過報告後に暫定規則をご承認頂き、大橋72期会長から小生に初代支部長が任命された。そして各委員やブロック長をご紹介し、行事計画や予算が承認されて終了した。引続き大橋会長より各部会連携要望と、三菱重工の先輩で68期会長の相川三菱重工社長から会員増強など、

激励と祝辞を頂いた。記念講演は渡辺東工大教授の「アジアはどう動くか」を頂き、会員懇親パーティーは神奈川ブロック長の慶応大学下郷教授の乾杯で交流が進み、河合早稲田大教授の閉会の辞で支部が無事にスタートした。

第1期の活動は4回の運営会で支部行事、ブロックの活動計画整合、予算などを審議した。ブロック制は手探りの発足だったが、各ブロック長が活発に活動され、見学会や講演会を開催し、地方分権の走りと思える活躍だった。また0区学生会は関東学生会となり、1994年6月4日に48校が参加して総会を開催し、ブロック制と同じ大学教授が各学生会ブロック長として見学会、講演会、ソフトボール大会など開催した。学生会の欧州見学会は1995年3月で、ベルリン工科大学やロンドン大学などに36名が参加し有益な企画となった。

なお初の支部総会は、大学や企業人と学生の交流を期待し、従来から3月に開催されていた学生員卒業研究発表会と同日とし、第1回支部総会と第34回学生員卒業研究発表会が併催されたのは、1995年3月15日の湘南工科大であった。



祝辞を述べられる相川三菱重工社長

第1期の助走から第2期の活動を追って

第2期支部長（環境システムエンジニアリング株式会社）
杉島 和三郎



関東支部は立ち上がったばかりと云うことから、第1期は設立準備会のレールに助走したテストラン的な感があった。幸い第2期の支部各役員は留任頂けたので5回の運営会で、設立総会時の暫定規則の修正、ブロックの運営通則制定、支部やブロックの表彰規程を制定した。また支部評議員や商議員適任者選任、2009年の学会創立100周年記事業に対し、支部や各ブロック協賛行事を企画した。更に第3期支部役員選任や第2期支部総会企画などもあったが、陰で支部運営会を支えて頂いたのは支部幹事会で、通算14回も開催し努力されたことを特記しお礼を申し上げたい。

各ブロックに目を転じると、第1期の実績を発展強化し、地元大学と企業が連携した見学会、講演会、会員サービスの一環としてのイーブニングセミナーなども開催した。特に理科離れの子供向け出前教室や、地元自治体と協働しての展示会などを開催する例もあったが、各ブロック長と役員や幹事のご苦労によるもので感謝したい。

一方、関東学生会は全国学生会企画の関西地区で開催された研修会参加、関東学生会企画の見学会を開催している。ブロック学生会も活発に活動し、見学会や講演会のほか、地元各大学の「メカライフの世界展」は子供向けの企画が開催されたが、大学教授の学生会ブロック長と、学生運営委員の活躍に負うところが大きかった。

以上のような活動を終えて第2期の支部総会は、第1期と同様に第35回学生員卒業研究発表会と同日の、1996年3月15

日に上智大で開催された。支部総会では活動や会計のほか、役員改選などの全議案をご承認頂き、第3期支部長として準備会から活躍された、東工大神本武征教授に引き継ぐことができた。ところで私事で恐縮だが、恒例になっている総会開催日の3月15日は、小生の誕生日で学会との強い絆を感じている。

振り返ってみると、設立までの準備と、第1・2期を通じて5年間を関東支部にかかわったことになる。この間、各支部の総会に参加して運営方法を学び、関東支部各ブロック行事にも激励を兼ねて出席して多忙だったが勉強にもなった。しかし関東支部は多数の会員数にリンクする支部交付金の絶対額が多く、他支部からの減額要望があって後輩支部として受入を判断し、各ブロック行事は手弁当や受益者負担をお願いした苦い思い出がある。

最後になるが、ブロック制の採用で従来以上に県ごとの会員サービスの一つの研究活動推進や会員相互の情報交換が強化され、また地元密着型の活動が増加して社会還元の一翼を担い、機械学会の認識が増進できたのではと思っている。なお関連写真は発見できず、第2期は活字のみの記載をお許し願いたい。そして小生が無事に任を終えることができたのは、大学や企業で多忙であるにもかかわらず、活動された各役員が小生を支えて頂いた結果である。加えて人生で素晴らしい方々と出会い、ご教示を頂き得難い経験ができことに対しても、心からお礼を申し上げたい。

第3期関東支部長を拝命して

第3期支部長（東京工業大学名誉教授）
神本 武征



私は1993年度の日本機械学会本部の庶務理事を務めていた。当時、関西支部の水谷教授（阪大）辺りから、各支部は少ない資金で苦勞して支部を運営しているのに、関東の連中は本部におんぶしてけしからん、関東にも支部を設置して活動すべきであるとの苦情が届いていた。理事会で何度か審議したあと、大橋会長が「本学会は仲良しクラブだから一部の会員に不満があるのは良くない。関東支部を立ち上げましょう」と決断された。ついては庶務理事がこれに当たるという命令が下り、杉島和三郎さん、白鳥先生らとブロック制など基本的な組織やニュースレターの発行などを整えて1994年度から発足の運びとなった。杉島支部長の下で第1期、第2期とお伝いをして、第2期も終わりに近づいたある日、代々木の学会事務所を退出しようとしたとき杉島さんから声をかけられた。「君、次を頼むよ」。予想外のことに一瞬たじろいたが、逃げ足が遅いので引き受けることになってしまった。その後、正式な手続きを経て第3期の支部長を拝命したわけである。

第3期のブロック長は下記の通りである。ご覧のように関東支部は8ブロックから成る学会最大の支部となり、また支部予算は会員数に比例して配分されるので、比較的余裕があった。ただしニュースレターの郵送料を節約するため学会誌に同封するなどの工夫も凝らした。関東支部の成立によって、それまで縁の少なかった関東内大学間の交流と連携が進んだのは大きな成果であった。各支部はそれぞれ特徴ある企画を立てて活動された。特に東京ブロックでは背戸ブロック長を中心に国立博物館でこども向けの行事を毎夏開催し、好評を博した。

支部の役員は小林敏雄副支部長ほか力のある幹事が大勢おり、仕事は円滑に進んだ。個人的にも支部活動を通じて多くの先生がたの知己を得て、その後の活動でいろいろとお世話になった。総会は玉川大学で開催し、卒業研究発表講演会を併設した。

会期を無事終えて、小林敏雄副支部長にバトンタッチした。最後に、共に支部の運営に携わった第3期の副支部長、ブロック長、幹事の皆様に改めて御礼申し上げる。

東京ブロック長	背戸 一登	日本大学 教授
神奈川ブロック長	田中 裕久	横浜国立大学 教授
埼玉ブロック長	大滝 英征	埼玉大学 教授
千葉ブロック長	吉田 嘉太郎	千葉大学 教授
茨城ブロック長	松野 建一	工業技術院 機械技術研究所 所長
栃木ブロック長	秋山 光庸	宇都宮大学 教授
群馬ブロック長	根津 紀久雄	群馬大学 教授
山梨ブロック長	牧野 洋	山梨大学 教授

変わったか、20年

第4期支部長（東京大学名誉教授）

小林 敏雄



1997年、初代および第2代杉島和三郎氏、第3代神本武征氏を引き継いで第4代支部長に就任した。関東支部立ち上げに関しては1992年に0区支部発足準備会が杉島委員長のもとに設置され、筆者も本部の編集理事を務めていた関係で、当初から参画した。本部と関東支部の活動の重複等を懸念する意見の多い中、当時の大橋秀雄会長、杉島委員長の強いリーダーシップによって船出したように覚えている。メカトップ関東 No.2（日本機械学会誌第100巻第944号付録、1997年7月5日発行）の巻頭に支部長挨拶を書いた。表題は「大胆に目標を定めて努力せよ」である。久しぶりに読み返してみると冒頭、「関東支部の歴史は浅く、諸活動も定まった形はなく、担当する役員、委員のキャラクターで柔軟に変化できる環境である。ブロック長、幹事の個性発揮をお願いする。関東支部は他支部とは異なり、本部との行事、企画の競合という問題が常に存在している。そこで、各ブロックの活動を大事にし、それらのゆるやかな連合体というコンセプトで活動を始めてきたように思うが、その基本方針は維持していこうと考えている・・・」とある。この時のブロック長には永井正夫氏（東京農工大）、秋山光庸氏（宇都宮大学）、小口幸成氏（神奈川工科大学）、藤森義典氏（宇宙開発事業団）らが、また支部幹事には宮本昌幸氏（明星大学）、川副嘉彦氏（埼玉工業大学）、山川宏氏（早稲田大学）、大富浩一氏（東芝）、塩崎忠一氏（日野自

動車）、谷江和雄氏（機械技術研究所）、山川新二氏（工学院大学）、事務局に岡島秀雄氏らがおられた（所属はいずれも1997年7月時点）。いずれも個性あふれる方々で個性発揮はお願いしなくてもしてくれた。関東支部発足から約20年を経た現在、支部としての活動は随分と盛んになり、多くの実績を積んできた。この間、機械学会は変わっただろうか。近代の日本は東京中心の構造が長く続き、2020年の東京オリンピック、パラリンピックの招致決定で、さらに東京一極化の傾向は強くなる。この傾向は機械学会にも影響する。大きな流れの中では機械学会も変わっているようで変わっていないという感じをもつ。

もうひとつ、変わっていない状況がある。メカトップの挨拶のなかで「理科離れや実験嫌い」という当時の風潮に触れている。この状況はまだ変わっていないだろう。先ごろ100歳の誕生日を過ぎた直後にお亡くなりになった豊田英二氏も若者の情熱の高揚に期待をかけておられた。1997年5月になさった講演で、工業にはひとつの知識だけではなく周辺技術の集積が必要であり、それが先進国としてのポテンシャルであり、そのためには学術の基盤が必要であると話された。メカトップに書いた。「大胆に目標を定めて努力せよ」はそのときの若者へのメッセージであった。筆者も余り後ろを見ない人間のひとりであるが、20年前を思い起こす羽目になった企画に改めて感謝する。

関東支部 20 周年に寄せて

第 5 期支部長（金沢工業大学，元東芝）
大輪 武司



1. はじめに

私が支部長を仰せつかったのは第 5 期ですので，関東支部も，ブロックの活動を含めてかなり軌道に乗ったところでした。その意味では，生みの苦しみを経験された先輩の先生方に比較すると楽でした。

2. 支部活動ということについて

機械学会は部門制を採用していますから，同じ専門の会員同士の意思疎通は比較的よくおこなわれていると思いますが，専門を超えた形での交流は難しいところがあります。部門だけでは小さな学会の集まりになってしまいますので，それを補うのが支部の最も大切な役割だと思います。

3. 企業の人間にとっての学会活動

支部長を引き受けた時には，企業の研究所に所属していましたので，企業の人間にとって学会活動とは何かを考えざるを得ませんでした。

企業でも研究所にいとある程度専門がはっきりして来て，私もかつて情報・知能・精密機器部門の前身である情報機器委員会の委員長をしたことがあります。

しかし多くの企業会員は企画や設計を職業にしています。装置やシステムを仕上げるためには，機構，振動，冷却，強度，材料，制御，ソフトウェアなどをすべて考え，そのうえで使う人が危険なことにならない考慮をしながら軽量化，コストダウン

をしなくてはなりません。環境に与える影響ももちろん考える必要があります。

これらの技術が，学会の中で異なる部門になっていることは，研究所以外の企業の会員にとって非常に不便なことで，部門で活動をする人は少数です。

高等教育機関の先生方が得意としている科学と企業の技術者が行わなくてはならない設計とは作業が逆向きです。

現状で存在しているもの，起こっている現象の性質や原因を探求するのが科学ですが，設計は性質を課題として与えられた時にそれを実現できる方法を考えなくてはなりません。典型的な例としては，空を飛ぶ鳥を見て自分も空を飛びたいと考えた時に，飛行機やヘリコプターを思いつくような作業なのです。

設計は創造です。芸術と似ています。これは JABEE（日本技術者教育認定機構）に指摘されるまでもなく，従来 of 工学教育ではあまり上手に扱えていませんでした。最近では PBL（Project Based Learning）のような形で，設計の実際を行う授業が普及してきましたが，まだ設計者や技術者を育てる教育として十分とは言えません。

学会においても，せめて支部だけはブロックの活動などを中心に，学問分野を超えて「企画や設計に役立つ」活動になるといいなと願っています。そしてそれが減少傾向にある会員数を増加に転じる方法だと信じています。

関東支部発足と 1990 年代

第 6 期支部長（筑波大学名誉教授）
成合 英樹



私が機械学会の理事を務めたのは、1992 年度の大橋秀雄会長と 1993 年度の土屋喜一会長の時であった。大橋会長の時に、それまで本部直轄であった関東、山梨地区に支部を置くことを検討する 0 区支部発足準備会ができ、会計担当理事として参加した。2 年間の設立準備を経て 1994 年度に関東支部が発足したが、学会理事の任期が終り、今度は関東支部の会計幹事を 3 年間務めた。その後 1998 年度に関東支部の副支部長、1999 年度に支部長を務める等、1990 年代には機械学会、そして関東支部に深く関わった。会員数の多い関東支部は設置後、各都県毎のブロック制をとり、活動のベースを各地の特徴を生かした活動を目指した。関東地区には、それまで日立地区と山梨地区で講演会が行われていた。関東支部設置後、日立地区の講演会は茨城ブロックの茨城講演会、山梨地区は山梨ブロックの山梨講演会となったが、支部長時代に関東支部としての講演会として、総会の折に講演会を実施するようになった。

1990 年代には、新しい時代の学会のあり方の議論に思い出がある。機械学会が 1995 年に創立 100 周年を迎えるにあたり、今後の機械学会のあり方を検討する第 2 世紀将来構想委員会が 1994 年から 1996 年度にかけて設置され、学会活性化のあり方が議論された。1980 年代は日本もバブル景気で勢いがあり、機械学会も 1989 年度から日立（金井会長）、三菱重工（相川会長）、東芝（佐藤会長）と 3 年にわたり社長を会長として迎え、会員増強にも力が入

った。高度な科学技術の進展が進み、機械学会も 1980 年代中頃より部門制が試行され、その後全分野で部門制がとられ、各分野の技術や研究の活性化や国際会議等の活動も盛んになった。

科学技術の進展は我々の生活の向上に貢献したが、一方 1985 年の日航ジャンボ機墜落事故、翌年にはスペースシャトルチャレンジャー号爆発事故とチェルノブイリ原子炉事故という重大な事故が発生し、科学技術の持つ明暗と技術者倫理の重要性が認識されるようになった。また情報機器の進展は、情報化時代をもたらし、多くの情報が直ちに広がるようになった。

1990 年代は、これら高度科学技術と情報化、そしてソ連邦の崩壊等による国際化（グローバル化）が進んだ。その一方、日本ではバブルが崩壊し、今後の進み方が大変難しい時であった。

このような日本の抱える多くの課題解決のため、第 2 世紀の機械学会は一般会員が積極的に活動する場の提供が重要ということで、部門活動の一層の活性化と共に、地域の特徴を生かした支部活動も今後は重要になるという思いであった。

関東支部ニュースの巻頭支部長挨拶で高度科学技術社会・情報化社会・グローバル化の進む中で、新しい日本を作っていくましようという主旨で書くと思ったが、具体的な方策を記すことが難しく、ただ「若い人たちに期待する」というインパクトの乏しい挨拶となってしまったことを思い出す。

第7期関東支部活動の思い出

第7期支部長（石川島播磨重工業㈱技監）
故 齊藤 忍



1. はじめに

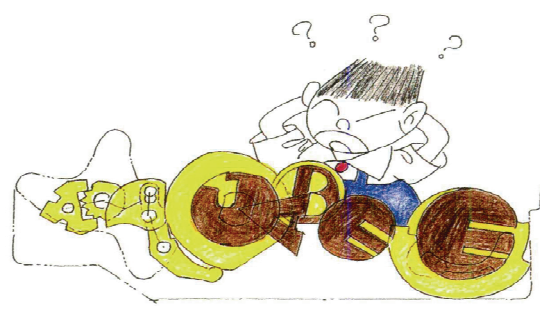
第7期支部長で、85期機械学会会長の齊藤忍様は平成25年10月26日に肝臓癌のため御逝去なさいました。したがって、第7期の欠落が忍びなく、同期の副支部長であった背戸が僭越ながら代筆の労を取らせて頂きますこと、御了承下さい。

2. 若き機械系エンジニアへの期待

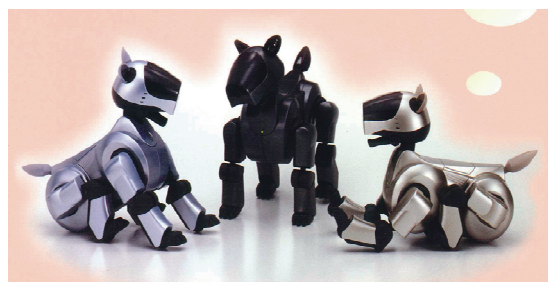
第7期関東支部の活動開始は2000年3月16日に埼玉大学で開催された第6期支部総会からでした。平成12年4月に新技術士法が施行されておりますので、同時期発足した日本技術者教育認定機構（JABEE）と活動開始時期が重なります。したがって、支部長就任の挨拶では若き機械系エンジニアへの期待が込められております。メカトップ関東巻頭文では「技術者が自分で問題を設定し、解決に至る方法を立案実施し、報告し、結果に応分の社会的責任を負えるようにするための方策です。グローバルな時代にはこういう能力を持った技術者が必要なのです【原文のまま】」のごとく。

第7期関東支部総会講演会は東京農工大・小金井キャンパスで開催され、200件を超える講演件数と460名の参加者、171件と510名の卒研発表件数と学生参加者があり盛況であったが、この期から始まった、第1回VPC賞（Visual Presentation Contest）と第1回BPA（学生優秀発表賞）は、その後の講演会の目玉になりましたので特筆されましょう。

総会講演会の特別講演では藤田雅博氏（ソニー）による「エンターテインメントロボットの開発と今後の動向（アイボのデモンストレーション付き）」があり、当時は大変珍しい犬ロボットによるデモンストレーションでしたので、約300名の参加者があり大変盛況でした。下図は藤田氏提供の犬ロボットの挿絵です。



メカトップ関東巻頭文の挿絵



エンターテインメントロボットの挿絵

3. あとがき

第7期支部長は平成12年7月5日発行のメカトップ関東巻頭文で強調されているように、若き技術者の育成に没頭されており、最後まで技術者の良い環境作りのためにAPEGエンジニア・モニタリング委員会（事務局・日本技術士会）の要職を全うされました。御冥福をお祈りします。

JABEE に関わった関東支部の思い出

第 8 期支部長（元日本大学）
背戸 一登



1. はじめに

第 8 期関東支部の活動開始は 2001 年 3 月 16 日に東京農工大で開催された第 7 期支部総会からでした。私は齊藤忍第 7 期支部長からバトンを受け、当時活動が始まった日本技術者教育認定機構（JABEE）を視野に入れながら、支部運営に当たったので、そのことを主な思い出に書かせて頂きます。

2. 関東支部と JABEE 及び新技術士制度

設立当時の日本技術者教育認定機構に関東支部は大いに貢献しております。第 5 期支部長の大輪武司氏は技術者倫理教育、第 7 期の齊藤忍氏と第 8 期の私は APEG エンジニアモニタリング委員会と JABEE 審査・調整、9 期の白鳥正樹氏も JABEE 審査、と歴代の支部長が関与しております。

私は支部長就任時、関東支部の役目として JABEE 支援を掲げました。写真はその時の総会風景です。新技術士制度は平成 12 年 4 月に発足しましたが、私が日本機械学会企画理事であった平成 10 年に、会員の技術認証検討 WG を立ち上げて、その成果を 1999 年 7 月号の機械学会誌に「国際的に通用する技術認証制度に対する日本機械学会の取組み」のタイトルで 7 ページの小論文を発表した所、それが文科省の土屋定之課長の目に止まり、科学技術・学術審議会専門委員に加えて頂きました。新技術士法の成立には、前記小論文がいささか役立っていると自己満足しております。中

も新技術士法における JABEE の位置づけは重要でして、JABEE プログラム修了生は技術士一次試験が免除されます。

第 8 期支部総会講演会では、ワークショップを開催し、始まったばかりの JABEE 審査報告会を開催しました。土屋課長にも文科省側から新技術士制度の意義と JABEE に対する注文と期待が述べられました。



支部長挨拶と支部総会風景

3. あとがき

現在、私は日本技術士会の国際委員会で仕事をしておりますが、国際的に通用する技術士資格における JABEE の位置付けは重要です。JABEE の認定する教育プログラムは国際同等性が担保されておりますので、JABEE 修了生は国際的技術士資格が要求する学歴要件を満たす可能性があります。その意味で、関東支部の JABEE に関わった意義は大きいと思います。

関東支部 20 周年を祝う

第 9 期支部長（横浜国立大学）
白鳥 正樹



関東支部が発足してもう 20 年が経ったのですね。おめでとうございます。記念誌担当の植田先生から、私が支部長を務めたころのことを一言書くように要請がありました。そのことも含めてこの 20 年の支部の歩みを振り返り、今後目指すべき方向について、私の思うところを述べさせていただきます。

発足当初: 関東支部がないことで、0 区（現在の関東支部に相当する地区）の会員が本部の活動を独占しているとの他の支部からの強い批判がありました。本部の業務と 0 区固有の業務を区別して、後者についてはきちんと関東支部として立ち上げて、支部がこれを担うべきという正論です。しかし、全会員の 4 割近くを占める関東支部が正式に発足した場合、他の支部と同じ割合で支部交付金を配ることになれば、大きな金額となって本部会計が持ちません。このようなわけで、関東支部については配分額を大幅に減額する代わりに、本部事務所の利用、支部担当事務職員の配置等に特別な計らいをしていただくということで、発足することができました。理事会、他の支部等の中でいろいろ意見が分かれる中で、関東支部の発足を決断された大橋会長と、それを受けて発足に尽力された初代支部長の労を多としたいと思います。

第 9 期目のころ: 関東支部はその地域に含まれる都県別にブロック制をとっており、それぞれに属する大学、高専、公設研究機関および産業界が協力して、草の根の活動

が行われておりました。この素晴らしい活動の成果を目の当たりにして、当初関東支部の発足に消極的であった私も認識を改めました。山梨のロボコンに 2700 名、埼玉の科学者の卵コンテストに 2500 名、群馬のメカメカフェアに 1800 名などがその例です。いずれも若い小中高生が対象で、彼らに機械というものに興味を持ってもらうのが狙いです。当然ご両親も連れ立って参加しておられるので、大人の方たちにも機械および機械工学についてご理解をいただく絶好のチャンスです。学会の社会への発信という重要な一翼を支部が担っているということを実感いたしました。

今後の展開に向けて: その後 2006 年に「機械の日」が制定され、全国の市民向けの草の根活動がますます活発に行われるとともに本部においても一元的に把握されるようになりました。社会の中の機械学会、社会に発信する機械学会として、支部の果たす役割は、ますます増大していくものと考えております。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故は、技術の持つ社会性を浮き彫りにしました。新しい技術およびその成果物としての人工物が社会に実装されるとき、我々技術者はその技術が持つリスクとベネフィットをきちんと分析して社会に説明し、社会の受容を得ることが求められております。支部がそのような活動の中核となって、さらに発展していくことを期待しております。

関東支部 10 周年の思い出

第 10 期支部長 早山 徹



2002 年、第 9 期支部長に内定されていた白鳥先生正樹先生から突然お声がかかり、関東支部第 9 期の副支部長、引き続き第 10 期の支部長をやってくれとのご要望があった。私は 1993 年に日立製作所機械研究所長を退任後、次第に機械学会から遠い存在になっており、適任かどうかは疑問があったが、白鳥先生とは 35 年余りの長いお付き合いで、特別おことわりする理由もなく、お引き受けすることになった。

関東支部の活動内容等も良く知らないまま、白鳥支部長のもとで 1 年間副支部長として勉強させて頂いた。

当時関東支部は、機械学会本部とは一線を画し、地元企業との産学連携や次代を背負う子供達の育成など、地元に着した特徴ある活動が精力的に展開されており、大変心強く感じた。このような、機械学会にとっても、日本の機械技術の発展、普及にとっても有意義な活動の展開に、少しでもお役に立てればと思った次第である。

2003 年春に支部長に就任し、鈴木浩平副支部長をはじめ有能な幹事の皆さん、そして地域密着の活動の主体である各ブロック長のご支援を得て、支部の事業が開始された。

この年は関東支部 10 周年の節目の年に当たり、これまで先輩方によって培われた関東支部の実績と力をさらに伸ばし、認知度を高めるのが大きな目標であった。

各ブロック長さんには、知恵を絞って地元密着型のイベントを企画して頂き、名称

の冠に「関東支部 10 周年記念」と付けて頂くようお願いし、それぞれのブロックで様々なイベントが精力的に展開された。

私達幹事会メンバーは、その大部分のエネルギーを 10 周年記念式典、総会、講演会に注ぎ込むこととなった。先ず会場は出来るだけ人が集まり易い場所ということで、新宿の繁華街に隣接する工学院大学を選んだ。当時、機械学会の大先輩である大橋秀雄先生が理事長、三浦宏文先生が学長を務めておられ、お願いに参上して快くお引き受け頂き、三浦先生には大学側の実行委員長までお引き受け頂くこととなった。特別講演は、当時失敗学で売り出し中の工学院大学教授畑村洋太郎先生に「失敗学のすすめ」と題した講演をお願いし、市民フォーラムには、当時私がお世話になっていた、防災科学技術研究所片山恒雄理事長と東京大学生産技術研究所目黒公郎教授に地震防災の話をお引き受け頂いた。

その結果、一連の総会関連行事には、招待者 60 名を含め、566 名の方々にご参加頂き、その締めくくりとも言える懇親会が大学の立派な食堂で開催され、200 名近い方々にご出席頂き、大いに盛り上がり、楽しいひと時を過ごした。

関東支部 10 周年という大事な事業を、支部幹事、ブロック長をはじめ、多くの方々のご支援、ご協力を得て、全う出来たことは、私にとって何よりも大きな喜びであり、ここに紙面をお借りして関係された皆様に衷心より御礼申し上げます。

10年前を思い出して

第11期支部長（(一社)日本クレーン協会）

鈴木 浩平



私は本学会の関東支部の設立委員会のメンバーでもあり第1期の杉島支部長の下で副支部長・東京ブロック長を務めたあとも支部委員にも任命されていたので、まさか支部長になるとは予想もしませんでした。第10期早山支部長に説得され創立10周年記念事業が終了した直後から1年間支部長の任に当たらせていただきました。

実は前年の副支部長のときに、支部創立10周年特集号の「メカトップ関東」誌上で歴代支部長による座談会がもたれ私が司会をさせていただきました。関東支部活動の将来展望として、初代杉島支部長を始めとする各支部長経験者から多くの貴重なご発言があったのですが、皆さんが特に強調されたことは、“関東支部の活動は本部や部門の活動とは異なったインセンティブを持つべきであり、それは、各ブロックを核とする「草の根活動」的なアクティビティに強いインセンティブを置くべき”とすることでした。

第11期の支部運営会では、その期待に応えるように、各ブロック長に対して従来にも増してブロック独自の活動を展開して下さるようお願いをした記憶があります。幸いにして、11期の8名のブロック長は意欲的な方々ばかりでユニークな活動を展開して下さり大変に嬉しく思いました。

東京ブロックでは毎年夏休みに国立博物館で「おもしろメカニカルワールド」という小中学生対象のイベントを発展的

に開催されたほか、最新の話題でのイブニングセミナーを連続的に開催されました。神奈川ブロックの「産官学交流会」は全国的にも産官学活動の先導的な役割を果たしていました。埼玉ブロックの「ものづくり啓蒙活動」や、千葉ブロックの「千葉産業人クラブ」との共催活動も地域の特徴を生かした草の根活動として展開されました。茨城、栃木、群馬、山梨の各ブロック活動も、それぞれに特徴があり、支部長としてそれぞれのイベントの招かれたときに強い感動を覚えたものでした。特に、山梨で行われた「ロボコンやまなし」では「日本機械学会関東支部長賞」を設けていただき審査員として参加したのは忘れられない思い出でした。

私にとって、大変に幸せだったのは、支部本部の役員の皆さんが若々しくエネルギーギッシュな方ばかりだったということでした。埼玉大学の佐藤副支部長はじめ庶務、広報、事業などの全委員が和気あいあいの雰囲気を作ってくださり、支部運営会はいつも活気に溢れていました。

10年も前のことになりましたが、能力不足の支部長を支えて下さった当時の委員の皆様は厚くお礼を申し上げます。

関東支部は創立20年の節目を迎え、さらに新しい活動を展開されることを期待し、各ブロックではユニークな「草の根活動」が一層発展することを祈念して挨拶といたします。

(2013年10月16日)

第 12 期

第 12 期支部長（埼玉大学） 佐藤 勇一



正直な感想としては、第 11 期支部長の鈴木浩平先生から引き継ぎ、よく分からないままブロック長、幹事、監事の皆様、そして、関東支部担当の村山ゆかりさんにお世話になりっぱなしで、アツという間に久保田裕二第 13 期支部長に引き継いだというのが実感です。

学術的な発展を主眼とした部門活動とは異なり、支部活動は地域の様々な企業の方々と連携し、地域の人々、特に子供や学生に対する活動と会員の増強活動が大きな柱だったように思います。

8つのブロック活動は活発で、小中学校を対象としたものも多く企画され、なかには参加者が1000人を超える企画も実施されていました。このような活動も、日本機械学会の裾野を広げる役割を担っていると感じておりました。

また上野の国立科学博物館におきまして「おもしろメカニカルワールド」を8月2日～14日まで開催いたしました。子供はもとより誰もが楽しみながら科学技術にふれ、学べる場を実現する活動であり、この活動は現在も継続して実施されています。

この様な小中学生を対象とした活動を通じ、様々な教材が製作されてきました。そのような教材を小学生向けに整理し直し「おもしろメカニカルワールド」（オーム社）として出版しました。多くの方々にご執筆・ご協力を頂きました。更に、多くの方に参加いただきました。山口ひとみ先

生（宇都宮大学、当時）は、自分のところに質問にきた学生に、「まずこの教材で遊ぼう」と言って学生の質問に答える前に学生と実際に遊んで教材の出来具合を検討したと伺っております。本にするに当たり、オーム社の方々にも随分お世話になり、また、有益な助言も頂きました。また、久保田第 13 期支部長には、編集委員としてご尽力いただきました。

期の最後には、関東支部総会講演会を武蔵野の面影の残るすばらしい東洋大学川越キャンパスで開催させていただきました。東洋大学工学部教授神田雄一先生初め多くの先生方に感謝申し上げます。



おもしろメカニカルワールド風景

自己評価：「×」と「△」

第13期支部長（東芝リサーチ・コンサルティング）
久保田 裕二



関東支部 20 年の歴史の中で自分は何を残せたのか、支部長としての自己評価を試みました。その結果は、「×」と「△」です。

支部長就任時、メカトップに「技術者に対する PR」と題した巻頭言を書きました。技術者の会員減少に歯止めをかけるためには、一般の技術者に対し機械学会が持つポテンシャルを PR し、大学などの先端技術に触れられる場を増やす必要があると。これは現在でも機械学会全体の大きな課題ですが、残念ながら支部長として形に残せたものはありません。したがって、評価は「×」です。

支部長としてのもう一つの目標は、一般の人（特に子供たち）を対象としたイベントの強化でした。子供たちの理科離れに対応することなども支部の重要な使命だと考えていました。この目標に対しては、2007 年に「機械の日」関東支部行事として 16 件のイベントを開催し、4 千人近い参加者を集めることができました。ただし、これは一年留年しての成果ですので、評価は「○」ではなく「△」です。

「機械の日」は、“機械”の意義や役割を広く社会と共に考えることを目的に、2006 年に制定されました。初年度は本部主催の記念式典が行われただけでしたが、日本機械学会創設 110 周年と重なる 2007 年度には盛大なものにする必要がありました。機械の日の制定にも関わらず私は、支部長（2006 年度）として関東支部がその

中心を担うべきだと考えました。そして、自分の責任においてそれを実行するため「関東支部機械の日イベント企画委員会」を設置し、支部長退任後も関わることにしました。

開催したイベントの多くは以前から行われていたものの衣替えでしたが、参加者全員へのノベルティ（クリアファイル）を用意し、会場に幟を掲げるなどして「機械の日」「機械学会」を売り込みました。この年の夏は記録的な猛暑でしたが、満員のため参加を断らねばならないイベントもあるなど大いに盛り上がり、各会場は子供たちの歓声に包まれました。

この成功は、各イベントの担当者は勿論のこと、企画委員会メンバーと事務局の奮闘によるものです。特に、短い任期で次から次に委員が代わる学会において、信頼できる事務局の存在が重要であることを痛感しました。

当時を振り返り、「×」だけで終わらずに済んだことに少しだけ安堵するとともに、私を支えてくれた皆さんに対する感謝の気持ちが蘇ってきました。



（クリアファイル図案）

関東支部 20 周年にあたって — 2007 年の頃

第 14 期支部長（横浜国立大学）
宇高 義郎



我々が担当した頃から、かなり時間が経ったような、そうでもないような 6 年ほどの期間が経過しました。当時のことを思い出そうと、パソコンの機械学会関連のフォルダから引っ張り出した支部運営会の記録、ピクチャフォルダにしまっている支部イベントの写真を眺めていると、だんだんと記憶がよみがえってきました。

当時の山田一郎副支部長、水野毅庶務幹事、各ブロック長をはじめとして、多くの皆様と一緒に行事企画が進められました。ある意味で皆様がボランティアな立場で進めている学会支部活動ですので、楽しくなければいけないとの（個人的な）原則にしたがって、会議のあとには懇親の場を設け、また何回か皆さんで宿泊の機会もあったことを思い出します。

右の欄には、そのようなときの、既になつかしくなりつつある写真を載せました。以下、順に、

- (1) 2006 年に制定された機械の日・機械週間の 2 年目だったこともあり、どのような行事を対象とするか検討しました。その一つの「おもしろメカニカルワールド」の会場での記念写真です。
- (2) 環境に関するシンポジウムを立ち上げました。
- (3) ちょうど学会の創立 110 周年の記念式典が盛大に行われました。
- (4) 秋に泊まり込みで、支部運営について熱心な議論がなされました。

関東支部の益々の発展を期待いたします。



(1) おもしろメカニカルワールド
(国立科学博物館, 2007 年 8/7)



(2) 関東支部主催エコランシンポジウム
(ツインリンクもてぎ, 10/6)



(3) 学会創立 110 周年記念式典
(明治記念館, 10/26)



(4) 関東支部運営会 (御殿場, 11/30)

社会に貢献する Society 活動をめざして

第 15 期支部長（東京大学）
山田 一郎



関東支部の存在意義は何か、どのように社会に貢献するのか、多くの歴代支部長が最も悩んだ点ではないでしょうか。関東支部は日本機械学会会員の約 40%が所属する大組織であり、支部活動も非常に活発なので、他の支部長からは大いに羨ましがられます。しかしながら、大組織なるが故に、本部や部門の活動とは一味違った活動を展開しなければならないという暗黙のプレッシャーがあります。支部長はじめ支部役員が悪戦苦闘する所以です。

◆活動方針について

いろいろと試行錯誤しましたが、いかにして社会に貢献する支部活動にするかが、最も大きな課題であると考えました。

日本機械学会の活動は、支部と部門が 2 本柱となっていますが、「部門」が専門的な活動を中心とする全国組織であるのに対して、「支部」は地域に密着した会員サービスおよび社会に貢献する活動を行う、いわゆる“Society”であると考えて、この“Society”活動に力を注いできました。

一つは関東支部会員が気楽に集える“Community”（コミュニケーションの場）の提供です。これによって、支部活動への参加意識を持っていただくことをめざしました。もう一つは青少年の理科教育への貢献です。理科離れ、工学離れが言われて久しいですが、日本機械学会にも青少年の教育には大きな責任があります。そこで関東支部では、地域と連携した中・高校生の理科教育の推進を模索することとしました。

◆シンポジウム「地球環境を考える」

「地球環境を考える」シンポジウムを開催したのもいい思い出です。このシンポジウムは、関東支部の規模を生かして講演者と参加者との自由かつ活発な意見交換を行い、地球環境に対する将来のあり方についての情報発信につなげることを目的としました。第 15 期では、地球温暖化対策を考える大学や企業の専門家を招いて、栃木県の「ツインリンクもてぎ」で開催しました。1 日目のイブニングセミナーでは食事をしながら講師と参加者との間で自由かつ活発な意見交換を行い、2 日目にはレースコースのツアーを実施するなど、大学や企業の研究者、技術者から学生までが参加できる“Community”としても大きな役割を果たしたと思っています。



シンポジウム「地球環境を考える」

◆歴代支部長懇談会

関東支部発足 15 周年を記念して、歴代支部長懇談会を開催しました。10 人もの歴代支部長に泊りがけで箱根までご参集いただき、今後の支部活動について意見交換したのも印象に残るイベントでした。

関東支部創立 20 周年に寄せて

第 16 期支部長（荏原製作所）
後藤 彰



関東支部創立 20 周年、おめでとうございます。2009 年に機械学会流体工学部門長の責務を終え、一息つく間もなく、同年に関東支部長という重責を拝命した事を、つい先日の事のように感じます。振り返れば、第 15 期支部長の山田一郎先生から宿題を頂戴し、その多くを次期支部長の木村康治先生にゆだねる結果となった一年でした。それでも何とか責務を全うできたのは、関東支部を構成する 8 つのブロックの強力なバックアップによることは間違いない所です。改めて当時の皆様方のご協力・ご支援に感謝いたします。

支部長に就任後、毎回の支部運営会において、各ブロック輪番でその経験・ノウハウをご披露頂くことにしました。例えば、企業人中心の産業人クラブと一緒に産学連携プログラムを企画することで、大学が企業の情報を得ると同時に、支部技術賞への地元企業推薦を掘り起し、さらに受賞企業に商議員活動に参加してもらうといったプラスの循環を創出する事、あるいは、人の集まるイベントに押しかけて企画を行う事や、教育委員会とのパイプ構築による学童の各種イベント参加への配慮など、ブロック活動の現場は、支部関係者が共有すべき学会活動活性化のアイデア満載の宝の山であると感じました。

開催行事としては、山田前支部長の発案による「地球環境を考えるシンポジウム」が印象に残っています。第 16 期の同シンポジウムは、「ツインリンクもてぎ」という隔離された環境でエコカー試乗会とい

う実体験イベントを含めた企画でした。そこで、私が担当することになった次期のシンポジウムでは、環境問題を真正面から議論する企画とし、首都圏で開催しました。国家戦略室、総合電機・自動車・鉄道・環境などの各産業界、大学や国研などから論客をお招きし、「機械工学は日本経済と環境の架け橋になれるか」のパネルディスカッションも行いました。実際の開催は第 17 期の木村支部長の下で開催されましたが、多くの参加者を得て有益な知の交流ができたと感じました。惜しむらくは学生の参加者が少なかったことですが、懇親会などで講師の方に議論を挑む学生が居たことは、ちょっとした喜びでもありました。

機械学会は「機械技術者のための学会」として設立されました。身の回りを見渡せば、あらゆる人工物は機械工学で作られていることを再認識します。私自身が産業界の人間であり、学会活動では常に産業界と大学等の Win-Win の関係構築を意識していますが、それが関東支部とそれを構成する各ブロックの活発な活動で実践されていると感じています。

私の大好きな言葉に「世界を見渡せば未来が見える」というロケットの父・糸川英夫先生の言葉があります。大学や会社の枠を越え、学会を通じて外の世界と接することで未来が見え、新しい価値が生み出されると強く感じています。そのような場を与え続けている支部活動が、ますます発展することを祈念いたします。

第 17 期を振り返って

第 17 期支部長（東京工業大学）
木村 康治



第 17 期を締めくくり、第 18 期に引き継ぐ支部総会を目前に控えた 3 月 11 日、東北地方太平洋沖地震が発生しました。被災に遭われた地域の、一日も早い復旧復興を願って止みません。支部では、急遽総会を中止し、最終的にはメール審議を経て、期替わりを迎えました。同時に開催予定の総会講演会と卒業研究発表会も取り止めました。入念な開催準備をくださっていた会場校の慶應義塾大学ならびに実行委員会と関係の皆様のご尽力とご高配に、心から御礼申し上げます。

第 17 期は、「新たな出会いと発見を求めて」を掲げて始まりました。支部の活動は、まさに 8 つのブロックの活動の集合体です。当期においても、多彩な、そして多くの積極的なイベントが、生き活きと展開されました。会員相互はもとより、地域社会の多くの皆様とのさまざまな交流があったと思います。魅力あふれる活動を続けて下さっているブロックの皆様にも、深く感謝申し上げます。

支部の活動として恒例の「夏休みおもしろメカニカルワールド」では、多数の小学生やご家族の参加を得ました。また、環境エネルギー問題に機械工学がどのように貢献できるかをテーマとして、シンポジウム「地球環境を考える」（支部、神奈川ブロック合同企画）を開催しました。

学生の参加者が半数に達したことが特徴的で、活発なディスカッションが行われ、とても有意義な交流が実現しました。ご協力いただきました企業・大学等の皆様に心より感謝申し上げます。

支部協議会の大切さも実感しました。学会運営に関する実質的な議論が行われるとともに、本部と支部、支部間の相互理解および貴重な交流の場となっています。今後も支部から建設的な意見や提案を出していくことが、学会の将来のために重要であると考えられます。

学会・支部のさらなる発展のためには、日本機械学会の名前と、その活動が私たちの日々の生活にとっても身近な存在であることを、一人でも多くの方に知っていただくことが大切だと感じております。そのため、普段から周りの方々と、支部や学会の活動について話題にするなど、多くの方々に関心を持っていただけるように心がけました。

最後に、地元の企業、学校、研究所等に、その機械工学の専門分野にかかわらず、横断的に支えられている支部の活動は、社会への学会の寄与を考えると不可欠です。立場や環境の異なる仲間の交流を一層深めることにより、支部の活動がますます発展していくことを祈念致しております。

第 18 期の活動を振り返って

第 18 期支部長 (埼玉大学)
水野 毅



第 18 期の活動を振り返るとき、2011 年 3 月 11 日に発生し、東北及び北関東に甚大な被害をもたらした東日本大震災について触れないわけにはいかない。震災により、翌週 (3 月 18・19 日) に開催を予定していた関東支部総会講演会は中止を余儀なくされ、支部総会も開催できなかった。そのため、恒例の新旧役員交代の場もなく、急遽、書面審議によって新役員承認が行われることとなった。

第 1 回支部運営会は、それでも通常よりやや遅い 4 月 27 日に開催することができた。しかしながら、関東でも震源地に近い地域の受けた被害は大きかった。また、原子力発電所の運転停止の影響は深刻で、夏期には、電力需要が供給能力を大幅に上回るため、再び計画停電が実施される恐れがあるとの報道がなされていた。

このような状況を鑑み、この期の基本方針として「できることを粛々と進めていく」ということを掲げた。結果的には、一部の行事を除き、ほとんどの行事を例年のように開催することができた。これは、ひとえにそれぞれの行事において運営に携わった方々の創意工夫と努力の賜物であり、ここに改めて感謝の意を表したい。

また、直接の支部活動ではないが、関東支部では 3 年ごとに年次大会が開催されている。ちょうど、この年は、東京工業大学大岡山キャンパスで開催されることとなっていた。その開催にあたっては、夏期の電力不足の懸念から、原則として学術講

演を 9:00~11:00 ごろ、企画行事を夕刻 15:00 過ぎ~18:30 に実施するという異例のプログラム編成となった。それに伴う支出増から財政的にかなり厳しくなることが懸念されていたが、これも実行委員会のご尽力によって克服され、結果的に支部の財政を潤わしていただいた。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたい。

しかしながら、前々期ぐらいから顕在化してきた支部の財政問題を抜本的に解決するような思い切った施策を打ち出すことはできなかった。また、この期の後半では、各ブロックで設けられている賞の規定について、かなり突っ込んだ議論を行ったが、全体を纏めるには至らなかった。このような重要な課題を全て先送りにしてしまったことは、痛恨の極みである。

第 18 期の支部総会は、千葉ブロックにご担当いただき、日本大学津田沼キャンパスにて開催された。総会の締め括りで退任の挨拶を述べ、新任の挨拶ができなかった支部長の任を終えたときには、いろいろな意味で感慨もひとしおであった。

振り返ってみると、支部長という大役を務めることができたのは、運営委員の方々及び事務局担当職員の大通さんのご協力の賜物である。改めて心からお礼申し上げます。特に、渡辺庶務幹事には、2 年間に涉ってお付き合いをいただいた。今となつては、会議終了後に毎回のよう催した非公式懇談会が懐かしく思い出される。今さらではあるが、心から感謝したい。

第 19 期の思い出

第 19 期支部長 (IHI)
小林 正生



関東支部は 1994 年に発足し今年度で 20 年を迎えました。会員として大変喜ばしく思います。本部が関東にあるため発足が遅く、学会社団法人化の翌年に発足した関西支部の 1925 年、比較的遅かった東北支部の 1965 年に較べても大きな違いがありません。歴史が浅い支部運営の伝統がありません。また発足当時は部門制が定着しかけた頃に合致し、部門活動に影響が少ない外向きの活動や産学官交流などの地域貢献に重点を置いた活動が中心になったようです。主催する講習会も第 8 期から始まった「技術者のための継続教育セミナー」だけでした。関西支部の専門部会や懇話会など部門的活動が多いのと状況は異なっています。

20 年は人間でいえば成人です。成人式を迎える準備として足元を固める必要があります。支部規則の全面改正を行うことになりました。役員に欠員が生じた場合や役員会の成立・決議条件、議事録作成や報告の規定など多くに現状にそぐわない部分がありました。改正は松村庶務幹事を中心にご尽力いただき、3 月の総会承認に間に合わせることができました。

また支部 8 ブロックを対象にブロック運営についても調査しましたが、商議員と運営委員の関係、ブロック表彰の有無、商議員会・ブロック総会の有無などで、ブロック毎に異なった運営がされていることがわかりました。これらを包括するブロック運営通則の検討が必要で、これは来期以降への引継ぎ事項にしました。

講習会は支部会員サービスとして不可欠な行事であり、また交付金に頼らない活動資金を得るためにも重要です。前述の支部唯一のセミナーは、当初は定員 50 名の会議室が一杯になるほど盛況でしたが、JABEE 認定制度が定着した近年では、参加 6 名程度で赤字が続いているため、断腸の思いで 19 期を最終回とする判断をしました。この 12 年間、継続して講師を担当くださった皆様に感謝申し上げます。運営側は今後参加者がより集まる支部講習会を多く企画してください。

「機械の日」イベント「おもしろメカニカルワールド」は木村、佐藤、金子、勝田教授の 4 研究室で 12 日間開催していただき子供だけで 1838 人参加と大変盛況でした。記念品に前期同様、「機械の日」マーク入りエコバックを数は倍の 4000 部用意し、残部は総会でも配布しました。

総会・総会講演会は首都大学東京 南大沢キャンパスで 3 月 15 日(金)、16 日(土)に開催しました。OS・一般講演が 309 件で 558 名、併催の卒業研究発表講演会は講演 302 件で 560 名、合わせて 1,118 名もの方に参加いただきました。

また神奈川ブロック「産学官交流会」、千葉ブロック「産学官シンポジウム」、山梨ブロック「ロボコンやまなし」など地区のイベントに参加する機会が多くありました。地元の企業、教育委員会などと地域に密着した活動を目の当たりにし多く感銘を受け、今では大変貴重な思い出になっています。